◉**ショツペンハウエル**の女子に就いての論文と、**ラスキン**の『**セサム、アンド、リリース**』中の『**リリース、オブ、クウインス、ガーデンス**』とを讀みて、兩者より提供せられし若干の問題を思ふ。（承前）

千葉安良

第三、以上の問題に對する批評及び論斷

(一) 女性論の範圍に入るべき諸問題

2. 女子の知性

これに就いてショ氏は第四に多く語り、第六に少し語つて居る、即ち

(一) 婦人は精神能力に於いて男子よりも早く成熟するが、その代りその精神能力理性といふものは極狹い範圍に限られて居る。

(二) 婦人は常に手近の物事ばかりを見、現在にのみ生活して居る。

(三) 婦人は知力において淺薄であるからたとへその直覺的理解力の鋭さで、自身の近くにある凡てのものを速かに認識することになるとしも、その視力の及ぶ範圍は限られて居て、少し遠くに在ることになると、なか〳〵注意が及ばない。

(四) 女子は何事に對しても純粹な客觀的の興味をもつことができない、女子は心の客觀性に缺乏して居る。

(五) 女子の心力には天才的に特質のあるものを有たぬ、即ち獨創的のものがない。

と云ふのであるラ氏はその女性に對する理想の方から、その第一論において

(一) 女子は物の眞相を照らし、正義と純潔とを人の世に保つて、難局を神聖化する知力を有つ。

(二) 女子は明かな智性とやさしい心情とをもつ。その知性は强烈な純粹な愛情を胸中深く納めて忍耐つよく感情を抑制するために他の不美過失を救ひ、他の性情を鼓舞し向上させる。

といふ斷定を下して、さらに女子は理想の啓示者でなければならぬといふ感想的の結論を下して、それ故に

(三) 女子は先天的に誤りなく賢明でなくてはならぬ。その聰明は自己發展のためでなく、自己拒絶のためであり、又良人の上に座せんがためでなく、良人に伍して行かれるためであり、又不作法な偏狹や愛情のない傲慢にさせるためのものなくて、無限に價値ある心情の柔らかさを保つためのものである。

と述べ、又別にその第二論の教育の處に

(四) 女子の知性は男子よりも早熟であつて、より早く六ケ敷い問題に導き得る。

と言つて居のである。

さて此の問題についてショ氏の論は如何にといふに、私は女子の性質を客觀して批評的に見た時に、凡てその論の通りであると言はざるを得ないやうに思ふ。幼稚園の幼兒時代からすでに著しく「知性」に關して男女の傾向の異るのを認め得る。實際幼兒を取り扱つて見て、その畫くもの製作するものを考察すればかほど迄にと驚くばかりである。（擧例は省く、多くの方はその經驗を有せられ又はやがて得らるゝことであらうと信ずる故に）小學校時代、高等女學校時代さらにそれ以上の高等教育の時代になつても、女子に此の五箇條即女子の精神能力理性の及ぶ範圍狹いこと、婦人は現在に生活すること、視力の及ぶ範圍の狹いこと、客觀性に缺乏して居ること、獨創の能力に缺くることは、事實上確かに現はれて居るやうに見られる。そこで私はショ氏の女子の知性に對する見解は、今日に於てもなほ誤つて居らぬと云はうとする。此の論の公けにされた頃から漸次發達して來た今日の

心理學はやはり如上の事實を認め且つそれに理論を與へて居る。若し此の事實を一々あげて「故に女子の知力は男子に比して劣つて居る」との語をなすものがあつたら、それは女子は甘んじて肯定しておいてよいと思ふ。但しそれは女子自らが卑屈な退嬰的の性情を養はんがためでなく、又弱者劣者の名のもとに安樂を貪らうとするためでもない。「女子はそれでよいのだ」と思ふ。少くとも日本の女子はそれでよいと思ふ。女子の精神能力理性が狹い範圍に限られて居ればこそ基礎の動かぬ家庭が形づくられる。子供は慈愛のやはらかい空氣にとりまかれて育ち、良人はやさしく忍耐づよくかしづかれるのである。女子に複雜な精神作用が營まれ、その胸中に權謀術數が貯へられて、その胸中が勘定高くなつて來て、それで世の中がよいものとは思はれない。狹くて強くするどく動く所に、女子が人類の擁護者として子孫を養ひ育てて愛の泉をその胸中に湛へてやり、良人を世の苦痛から慰め、なほあらゆる人々にそれを押し及ぼしてゆ

く使命を果しうるのであるとおもふ。もとより私の此の結論はショ氏の言の示すところが良好なる方面に導かれて居る場合を肯定するのであつて、それがわるい方に向つた場合を含まぬのである。最後の最後の論斷としてこれを肯定するので、それ故に女子はよい加減に頭を練つておいてよい。その頭腦は不明瞭で好いと云ふのではない。これは更らに後段女子教育の條において論ずる筈である。更らに婦人は現在に生活すればこそ尊い犧牲的獻身的の行爲ができ、又毎日毎日の煩些なる家庭の仕事に苦もなく從事し得るのである。これも私は女子が現在に生活することが人類の永遠の發達の上によいからこそ次第にかう發達して來たのであらうとおもふので、謙遜な心情で女子のためにこれも喜ぶのみである。これを鼻にかけやうとも云ひ譯の口實とせうとも思はぬ。その視力の及ぶ範圍のせまいこと、これにはそれを好しとする議論はない。高きに登りて快きは一はその視界が擴まるからである。誤なく世を送るためにも、亦深く長く甲斐ある人生を辿るためにも、これは女子にとつて悲しむべきことである。但しこれは知性の他の諸項を肯定する以上必然の結果として起り來るべきことであつて、致し方もないことであるが、女子たる我々はなるべく注意して此の缺點を助長せしめず眼界をひろめることにつとめねばならぬ。そして與へられた稟賦の範圍にれいて、うけ得た教育をもととして明らかなる心眼をひらいてそれに自然と人の世の樣とをうつして、ながくひろい世渡りをするやうに心掛けねばならぬ。(これはかうせねばならぬことまでは考が至るが、さてそれを實際身に行ふことはなか〳〵六ッケ敷ものであるがとにかく理論として述べておく)。次の客觀性に缺乏して居ること換言すれば女子は主觀が強いこと、これについては半ば、これを肯定してそれに甘んじ、半ばは充分にこれを矯正する方法をとりたい。といふのは、女子は感情が強くその強い感情によつて動く所に或る眞生命を見出し得るのであるから、その感情から導かれた主觀に滿足し、これによつて生活することにも亦意味があると信ずるからで、一面ひとりよがりの醜さも來すことのある代り、一面非常に幸福な安立を得るのである。ことに此の主觀に生活することは其の人自身にとつて絶大の強みを生ぜしめて、所謂女の念力といふ事實を現出せしめるのである。しかし此の主觀に生活することはその主觀の內容次第によつて善美にも惡醜にもなり得るのであるから、女子の精神生活には各人各人に善美惡醜硬柔に種々雜多な形式內容を與へてをるのであつて、常にその兩極を示して「女子は謎なり」といふ語をもうくるのであらう。實際の世に於ては此の女子の主觀の強いために、女子互に他を解し得なかつたり、又誤つた人生觀(客觀的に健全な人生觀があることを豫想假定して)によつて不明な日暮しをして他に迷惑をかけたりすることが多いのである、そこで、主觀のみに賴らずに成るべく客觀性を心中に養はねばならぬといふことになつてくる。然し此のことは極まで論ずれば即ち客觀性を主觀中に投入

せよといふことになるので獨り女子に限つた問題でなく、倫理上のやかましい論題となるのであるが、今こゝではたゞ、ひとり自己の主觀によつて自己の解し得ることばかりを聽視して滿足せずに、對世間、對人間の實生活の上にも又文學美術藝術等の賞翫をなし得るためにも進取的に又寛裕に構へて客觀性を養つて所謂「耕された」といふ敎育の効果の徹底した人格をつくつて、人類向上の路をたどらねばならぬとおもふ。獨創の能力に缺乏して居ることも女子には落ちついた思索の暇の與へられなかつた永年の結果であらうが。これは何も女子がやきもきして獨創の事をなさずとも啓きひらかるべきものは女子の產出する男子によつて開かれて十分であらう。たゞ女子にもその直覺的の感觸から又はその練り得た頭腦の働きからおこる種々の注文のないことはない。それまでも意氣地なく捨ててしまはずともよい。要するにこれに對してはこの評言は甘んじてうけてもよい。しかし强いて何事にも女子は獨創の力がないと悲觀してしまはずともよい。相當に啓發せられた頭腦ら何にまれ考へ出すを遠慮せずともよいと云ふのである。シヨ氏の所謂偉大なる獨創は中々男だとて女だとて出來るものではない。たゞ小なる凡ての活動は大なる或るものを現出する基礎段階として意味かあるのであるものを。女子は大を現出するための忠實なる小分子であつてよい。

以上私がシヨ氏の說に對して省みて思うた處論じた處は、女子の對男子否對人類の位置職分を論據前提としたものであつて、それはこの章に於いては獨斷的に常識的なされてをるのであるが、それは後段においてやゝ研究的に述べる積りである。そしておなじく此の立場から見てラ氏の所論はその(一)から(三)までが理想化された女性の中にぜひ欲しく又見出ださるべきものであつて、敎育の理想中には入れておきたい。但しなか〳〵これを實際の敎育上の手腕方法が產み出すことはかたい。具體的の一律の方法も容易につくられぬ。自分がその考をしつくり精

神にしみ込ませ、その趣味を以て全精神の傾向をノーブルにクリーアにそしてスマートに育て上げて、それぞれの階級に相應した實際にしみじみと一致する人格を有して後初めて育つる人にもそれを養ひうるやうにならう。私自らもたゞそれをのぞんでをるのである。ラ氏の第四は近世の心理學がこれを承認してをる。これは單に女子の知性の批評として敎育上に問題を來たすのみであるといふ取り扱ひにして、此の章には深く論及せぬことゝする。

かくて私の女子の知性に對する見解は、女子を絕對的人格と見てその知性においても絕對獨自の發展を主張せんとするのでなくして、相對的人格として人間生活の幸福と人類永遠の發達とを完うせんとする上から、知性の與へる直接的效果を以て——例へば發明發見をする如き——人類に資するよりも、その間接的效果を以て——即ち知性が人格の一部として、人格中に働いてラ氏の所說の如く發動して——人類に資するやうになりたいといふを論據として、そのためには(再びミルの言を以て)現在の女子の性質が果して女性を全く發揮して居るとも居ないとも云へぬ故に、すべてこれまでの女性に對する批評として與へられたことに屈服してしまはず、一方には十分に聰明に哲に女子の知性を育てゆくことをはかり、女子自身を賢明にするとともに、人間の世の複雜さの暗い悲しい方面を漸次に少くする大なる使命を少しづゝでも果したい。人類の生存的繼承の間にも、人性の遺傳的存續の間にも發展隆昌すべきものと退滅衰頽すべきものとあるために、それが錯綜經緯して理論上からは、又精神の直覺的要求からは容易に解決せらるべきことが、複雜に困難になつて居るが人の世の實際である。そこに人生の面白味もあらうが、又そこに人生の悲しさもやどる。その面白味とそのかなしさとを胸につゝむで一人の人間の小力を知つた時、一人の生涯の須臾をさとつた時、私は「人間の世の複雜さの暗い悲しい方面を漸次に少くする大なる使命」を女子の知性の直覺的作用の上に負はせた。男

子は雄々しく現在の葛藤に戰つて、現在をよく知りながらなほ將來のために實世界に實際的の道をひらいて下さる。女子は現在もよくわからない。未來のために實際的の道をひらく人でもない。たゞ眞、善、美の理想が直覺的に女子の心情の上に啓示せられて、それに強く動かされ牽ゐられて、自身は明らかに自覺せずとも、冥々の裡に、人類を眞愛美の理想に近よらしめる使命を果して居るのではあるまいか。此の考へは極めて獨斷的感想的で實際の世間の女子――奥樣、御新造、お内儀さん、小守娘、お女中、下女、さては矢場女などまで――に何で左樣な意味を見出し得ようと云はれる方があるかもしれない。しかしその半面のみが全局の眞ではない。幸ひに我が言を證すべき偉大の事實は、古往今來幾多の我等の同性者によつて示されてをる。畏くも　皇祖天照太神の神誥にも極めて雄大な又極めて直截明瞭な立派な眞を拜見することができるやうに拜推するが、これはあまりに恐れ多いから、筆にしまつることをえせぬ。怨み重なる故國に向つて雄々しく復讐せんと企てた剛悍の丈夫をして、「母よ、卿はローマを救へり。而して卿の子を失へり」との言をなさしめたコリオラナスの母は、亦母が子に對して有す偉大の力と、人間が共同團體――家、國に對して捧ぐる衷情の熱誠には如何に眞面目なる力强きものがあるかを人類に示したのである。彼女の示した眞は美しいものである。又尊く强いものである。すべて女子は彼女のやうな形式において眞を語ることが多い。搖籃の内、榮畝の間に、幼き人類の萌芽が、その母のやさしい物語りから、破り得ぬ犯し得ぬ眞の天地間に漲れるを啓示してもらふことは如何に多からう。稻城の烟の中に譽津別の皇子を捧げて、身は彼處の灰となりて貞と悌との二道を全うしたまうた我が狹穗姫皇后と、埃及の沃野に金髮を梳つて、稀世の英雄シーザー、アントニオの足を駐めしめ、放縱の行の繕ふによしもなくなつては、自ら胸に毒蛇を抱いて死に至つたクレオパトラとは、人間の有する美性の優と凄との二面を代表

してをる。すべての女子がその子供とその良人と若しくはその母とその家族とに仕ふるやさしみ、それは人間の有する美なるものを示してあまりあるではないか。ペツレヘムの野にクリストを撫育したマリアがクリストの胸に愛の泉を湛へしめた一事も、蝦夷の醜男のむらがり來るを弓矢とつて逐ひやつた形名の妻の働きも、女子のすべてがその子とその良人とに對して愛を注いで、その愛の尊さを人生に啓示する事を、著しく目立たせたことである。女子は人生に眞善美を啓示する使命を有すとの言はたゞ想念の產ではない。そしてそれをたゞ直接にするのでなしに、その源泉を人類の胸にたゞへしむるもの、女子の知性は此のために、カルチユアせられてゆくべきであらう。

（未　完）

（附　記）

前號の章末に、（2）女子の知性、以下の載つて居りますのは、組み誤りでございます。

なほ前號の活字の誤りの内、あまり困りますのだけ左に記しましたから、御訂正をねがひます。

五十八頁終りより七行目、ロザボニタールはロザボンヌール

同頁終りの行、シルはミル

夕立や蛙の面に三粒ほど　　子規